

南京官話を反映する若干の満洲文字資料

中村雅之

1. はじめに

本稿で扱うのは、満洲文字で漢語音を記した清代の資料である。この種の資料は数多く知られているが、大半は北京音を記したものと考えられる。満洲文字の主な書き手・読み手が旗人たちであることを考慮すれば、そこに記された漢語音を少なくとも北方音と見なすことはごく自然な想定と言うべきであり、実際に、『増訂清文鑑』や『清文啓蒙』などのよく知られた資料のほとんどは、そのような想定を支持する表記になっている。最も特徴的なのは「歌」「可」「何」などの果摂一等牙喉音開口の韻母を非円唇の「-e」とすることである。主として南京音によったと考えられている17世紀の宣教師ローマ字資料が果摂一等を開口「-o」、合口「-o/-uo」とするのに対して、『増訂清文鑑』等の満洲文字では開口「-e」、合口「-o」である。ローマ字と満洲文字という異なる文字体系を直接に比較するのはやや乱暴ではあるが、少なくとも果摂一等牙喉音の開口と合口を明瞭に区別するという北京音の特徴は満洲文字資料によく表れている。

しかしながら、中にはそのような北京音の特徴を示さない満洲文字資料も存在する。それらは宣教師のローマ字資料と同様に果摂一等の主母音を円唇の「-o」で記し、開口と合口を区別しない。換言すれば、満洲文字資料でありながら南京音的な特徴を示す資料ということになる。

2. 『新刻清書全集』

この資料については拙稿(2004)において一度紹介したことがある。漢語音を満洲文字で記した部分と、漢語と満洲語の語彙を対照させた部分とを含む、17世紀末の資料である。いくつかの部分から構成されるが、全編を通じて、果摂一等は開合を問わず「-o」と表記されている。

g'o 哥歌個果過…  
k'o 可科課…  
ho 何河火…

これは宣教師資料と共通する南京音的な特徴と言える。

また、この資料の中に口語語彙を集めた「満漢切要雑言」という部分があるが、その中に挙げられている「吃茶」という語彙が目を引く。「お茶を飲む」は清代の北京では「喝茶」が一般的である。音韻面で南京的な特徴が見出される以上、この「吃茶」も南京の言語の反映と見なすのが自然であろう。つまり、この資料集はその発音と語彙の両面から、南京の言語を反映していると考えられる。

3. 『清書千字文』『満漢千字文』

『清書千字文』と『満漢千字文』は「千字文」の各漢字の音を満洲文字で表記したもので、いずれも康熙年間のものである。『清書千字文』は満洲文字のみ、『満漢千字文』には漢字

と満洲文字が記される。両種ともに数種のテキストが知られている。各本の異同等、この資料の満洲文字表記全般については岸田（1994）に詳しい解説がある。

これらの資料では全てのテキストにおいて、果摂一等は開合ともに区別なく「-o」で表記される。

g'o 歌果過

k'o 可軻

h'o/ho 何河火

しかし、『清書千字文』と『満漢千字文』とでは、特に旧入声の韻母の表記にかなりの違いが見られる。

	<清書>	<満漢>
「色」	še	šai
「旻」	je	jai
「学」	hiyo	hiyoo

『清書千字文』の表記は上述の『新刻清書全集』と同じである。「学」については、「hiyo」が /hio/ を、一方の「hiyoo」は /hiau/ を意識した表記であろう。

果摂一等の表記と旧入声字の表記から見て、『清書千字文』の表記は南京音に基づいたものと考えてよい。「še」「je」「hiyo」などは現代南京音と同様、音節末に声門閉鎖を伴った短い音節であったと思われるが、満洲文字でそれを表記する方法はなかった。なお、岸田（1994）によれば、『清書千字文』の編者尤珍は「江南長洲人」である。

一方、『満漢千字文』を見ると、果摂一等の表記は南京風、旧入声韻是北京風である。池上（1962）によれば、英国本では版心に「官話千字文」、表紙に「京都奎壁齋梓行」とあり、岸田（1994）によれば、ヴァチカン本には「京都永魁齋梓行」とあるという。つまり、『満漢千字文』は「官話」たることを意識して北京で出版されたものである。この書が一部分とはいえ南京風の発音を含んでいるのは、北京における「官話」の性格の一端を示すものであろう。

#### 4. 南京官話と北京官話

上に述べた資料はいずれも 17 世紀後半のものであり、清朝初期における官話の実態を探る手懸かりになる。この時期、南京音に基づく官話が南方を中心として各地で用いられていたらしいことは宣教師資料から想像されるところであり、『新刻清書全集』や『清書千字文』はそのような状況を反映する資料とすることができる。これに対して、『満漢千字文』の方は「官話」という名目の下に北京で出版された書であるから、清初における北京官話の一資料ということになる。

『満漢千字文』において果摂一等の開合が区別されていないのは、北京官話にも南京音の影響があったことの証左である。しかし、この部分を除けば、『満漢千字文』の表記はやはり北京音の特徴を有していると言わざるを得ない。「色 šai」「旻 jai」「学 hiyoo」などは、19 世紀半ばにエドキンズによって北京音の特徴とされ、現在でも北京音の白話音と称される音形に連なるものである。また、尖団の区別は原則としてよく保たれているが、1 例だけ「見 jiyān」（『清書千字文』では giyan）とあるのは、やはり牙喉音の舌面音化がいち早く

生じた北京音の特徴が露出したものであろう。

## 5. 結び

本稿では、清初の満洲文字資料の中から、南京官話（および北京官話）を反映する資料を紹介した。およそ官話の音韻は、一つの体系を成すというより、地域的あるいは社会的な変種を容認する体系であったと思われるから、宣教師の記述など限られた資料で全体像を論じるには限界がある。したがって、北京音によっていると思われてきた満洲文字資料の中に、南京官話を反映する資料が存在することの意味は大きいと言える。

- 池上二良（1962）「ヨーロッパにある満洲語文献について」『東洋学報』第45巻第3号。  
岸田文隆（1994）「パリ国民図書館蔵の満漢「千字文」について(1)」『富山大学人文学部紀要』第21号。  
中村雅之（2004）「『新刻清書全集』所収「満漢切要雑言」について」『KOTONOHA』25号。